

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

2014年度第2回研究会（通算第9回目）

日時：2015年2月4日（水）15:00-19:00

場所：本郷サテライト7階

池田昭光（AA研ジュニア・フェロー）□「フィールド・空間・地域」

全員□共同研究の統括□

全員□成果公開方法についての討論□

概要

（1）池田さん発表

池田昭光さんの発表は、人類学のもつ空間概念と地域研究の空間概念の関係性を論じるものだった。特にレイチョウによる地域研究批判を紹介しながら、地域研究は視覚＝世界像の構築の政治史と密接に関係していることが論じられる一方で、人類学の空間概念はあくまでもフィールドであって、地域研究で想定されている地域とは異なることが示された。とはいえ、両者において被調査者から「見られることなく見る」を前提に空間認識は構築されている。とはいえフィールドの人類学は近年「みられること」を意識化し、これを前提にした「見る」行為によって研究しており、そこに人類学の可能性があるとし唆された。

（2）総括

総括の議論は、池田氏の発表をうけて行われた。そのなかで彼の指摘は極めて重要であることが確認された。なぜならオリエンタリズム批判以降の人類学の空間認識の特徴を、地域研究との関係において明瞭に指摘しているからである。現在の人類学において志向されているのは、まさに「見られながら見る」ことによって分かる人類学的知見の探求である。その一方で、この指摘によって分かったのは、オリエント＝東洋は批判されても、アフリカ研究や東南アジア研究という枠組みは揺るがない理由である。ここから指摘できるのは「見られることなく見る」という方法論は植民地主義と結びつくと批判されるが、そうでなければ批判されないことが分かるからである。この点においては人類学の空間認識は「見られることなく見る」「見られながら見る」「見られながら、共に見る」といった形で可能な領域を構築していく必要がある。

（4）成果公開方法

出版物について前回の議論をもとに以下のような形（仮）で執筆することとなった。

序論 高倉

1部 空間を占める（信田、赤堀、伊藤、石垣）

2部 空間を繋ぐ（大川、丹羽、飯高、深山）

3部 空間を統べる（斎藤、溝口、石田、小西）

4部 空間を捉える（棚橋、西井、飯塚、増田、今堀、池田）

結論 椎野

また2月末までに執筆者から仮題目を出してもらい、それをもとに3月末までに出版企画書を

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

つくり、出版社と交渉始めることで合意した。

発表要旨

「フィールド・空間・地域」 池田昭光

視覚には歴史性がある。西洋の古代から中世において視覚は価値の低い感覚であった。しかし、近代以降、視覚や観察が突出した地位を占め、学問の成立にも深くかかわるまでとなった。

レイ・チョウは、地域研究にも視覚の問題が関わっているとする議論を提出している。戦争の自己言及的な様態は、地域研究の自己言及的な知的枠組みと基盤を同じくしているのではないかと、それにより排除される表象が生じるのではないかと、批判をしている。

シリア調査にもとづく人類学の論文を検討すると、視覚の問題は人類学にも影響している。「見られることなく見る」という19世紀の「観察点」の問題を、近年の人類学者も踏襲しているからである。

フィールドの現場における緊張感が新たな認識につながるという、三木亘の議論を踏まえれば、「見られる」ことの緊張感にも知的可能性があるのではないかと。そもそも人類学とは、地域を横断しようとする態度を当初から備えている。それが、「地域」というより「フィールド」と言う時のニュアンスではないかと。横断する時の緊張感は、人類学の核心として手放さず、地域研究との対話にも据えられるべき論点だと考えられる。